慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウ井リアム・モリスの労働論（二、完）
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.4 (1922. 4) ,p.525(93)- 537(105)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220401-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1808, Du Pont edited Turgot's Oeuvres, he boldly reprinted his old text of the Ephémérides; this was copied by Daire in his edition of 1844." (Ashley, ibid, pp. ix-x)

と云ひしことは全く誤謬たり。吾人は Dupont du Nemours の編輯したる Oeuvres de Turgot を手にすること能はずと雖も一七七四年五月三日 Turgot が Caillard に與へし書簡に於て

"J'avais prié M. Dupont de le retrancher, mais il n'a pas voulu perdre trois pages d'impression"

と云ひ又 Robineau は

"Ce paragraphe parut, comme on voit, dans les Ephémérides, mais fut supprimé dans l'edition que Du Pont donna en 1808 des oeuvres complètes de son ami." (Robineau, ibid, p. 120)

と云ひしによる時は Ephémérides に於ては百一節より成りしも、一八〇八年の Oeuvres de Turgot 並びに Daire の編纂に係る一八四四年の Oeuvres de Turgot に於ては共に Reponse à une objection なる節は削除せられ、Réflexions の全篇百節より成れることを知るなり。この故に Ashley が Dupont de Nemours 並びに Daire の編輯による Oeuvres de Turgot 中の Réflexions が全然 Ephémérides のそれを直ちに移したるものなりと爲すは明らかに何等の根據なき錯覺にして Ashley 自身の言そのものが却て "Strangest of all" とすべきにあらずや。

吾人が Réflexions の邦譯を企つるに當りて底本として座右に置けるものは、既述の如く Robineau の版並びに Ashley の英譯本なるが果して Robineau の版が Turgot の一七七六年に訂正せられしものゝ "text exact" なるや否やは Journal des Economistes の Schelle の論稿を手にすること能はざるを以て斷言するを得ず。又一七六六年の Réflexions と一七七六年の Réflexions との間に幾許の差異ありや、之れ亦不明の問題なり。洵に Ashley の言へるが如く今日に於て「Turgot の眞正の字句に關して解答し能はざる幾多の不可解の疑問存するなり。」恐らく之れが眞の解決は Journal des Economistes 社と Guillaumin 社とに關係を有する巴里在住の經濟學者のみ之を能くするものならん。

ウ井リアム・モリスの勞働論（二、完）

加田哲二

四

人間の活働時と休息時とに希望と快樂を與ふる勞働はすべて有用な勞働である。有用なる勞働たるには少くも勞働において希望がなければならない。即ち第一の希望は休息の希望である。勞働が如何に快樂であるとしても、すべての勞働にはある程度の苦痛が伴ふ。さうしてこの苦痛を醫し、且つ苦痛を冐して勞働を遂行せしめるものは休息の希望である。休息時において充分なる享樂を行ふ前提の下においてのみ勞働が潑溂たることを得る。休息時は、苦痛を回復し、勞働の生産物によつて充分なる快樂を得る程度において長いものでなければならない。第二には生産物に對する希望が存在しなければならない。吾々の勞働は眞に自然の要求ではあるが、尙ほ且つ生産物が眞の生産たることを要する。吾々の生産するものは眞に吾々の要求するものでなければならない。もしかゝる種類の生産を吾々が行つてゐるとしたならば、吾々の能率は

甚だ大なるものがあるであらう。第三に勞働そのものにおける快樂である。ある勞働の執行においては吾々は自然的に快樂を感ずるが、すべての勞働において然るのではない。故に有用な勞働たるには勞働そのものにおける快樂がなければならない。かくて有用な勞働とは、第一に休息時における快樂の希望があり、第二に生産物の消費の快樂があり、第三に日常の活動における快樂がある勞働である。この三種の條件に合致する勞働が即ち有用な勞働である。然からざるものは人生に對する負擔であり、無用の勞働である。（"Useful Work versus Useless Toil" in Signs of Change. Collected Works. Vol. 23. pp. 99-100）

而してかくの如き有用なる勞働は人間自然の要求である。モリス曰く「勞働そのものにおける快樂の希望と云ふことが、如何に不思議に讀者の或者――否その大多數のものに考へられることであらう。けれども私は思ふ。すべての生物にとつては、その精力を費すのに快樂があり、さうして禽獸さへも、輕快、迅速、强健なることを喜ぶ。勞働してゐる人は……彼の肉體並にその心靈の精力を費してゐるのである。彼が勞働するときに、記憶と想像は彼を助ける。彼の思想許りでなく、過去の人物の思想が彼の手を指導する。さうして人類の一部分として彼は創造する。もしも吾々がかくの如く勞働すれば、吾々は眞に人たることを得るであらう。さうして吾々の生活は幸福で多忙となるであらう。」と。（Collected Works. vol. 23. pp. 99-100）かやうな勞働は人間自然の要求である。故に吾々はその勞働に對して何等の刺激報酬を要さない。モリスの描いたユウトピアは實にこの種の勞働に充ちてゐる。ユウトピアの訪問者は、ユウトピアの賢人ハンモンドに問ふに、勞働の報酬なくして人を勞働せめ、彼をして勤勉ならしむることを得るかを以てした。

『ハンモンドは眞面目に云つた。「勞働の報酬がないと。勞働の報酬は生命である。それで充分ではありませんか。

「然し、特別に良い仕事に對しても報酬がないのですか」と私は云つた。

「澤山の報酬があります」と彼が云つた。「それは創造の報酬です。……もし貴君が仕事の優秀と云ふことである創造の快樂に對して報酬の支拂をするなら、子供を生むことに對しても報酬請求書を出さなければなりますまい。」

「然し」と私は云つた。「第十九世紀の人に云はせると子供を生むことに對しては人間が自然的の欲望を持つてゐますが、人間は働きたくないと云ふ自然的な欲望も持つてゐるのです。」

彼は云つた。「私は昔の愚論を知つてゐます。それは全然眞實ではなく、また吾々にとつては無意味です。皆んなの人々から笑はれたフリエーはそのことをよく理解してゐました。」

「どうしてあなたには、それが無意味なのですか。」と私は云つた。

「何せと云つて、それはすべての勞働が苦痛だと云ふことを意味するのだ。吾々の考へは、君も知つてゐるやうに、それと大分違つてゐる。吾々は今富に不足してゐないのです。吾々の恐れるところは何時かは仕事が不足しないだらうかと云ふことです。吾々が失ふことを恐れてゐるのは快樂であつて、苦痛ではないのです。」

「さうですか」と私が云つた。「私はそれに氣が附いておりました。私はそれについて貴下の

御意見を伺ふと思つてゐるところです。あなたはどうして勞働の快樂をさう強く斷言することが出來ますか。」

「すべての勞働は快樂です。それは仕事をするときに名譽と富とを得る希望があるからです。さうしてこのことが實際の仕事が快樂でない場合にも、愉快な氣持を起させます。また貴君の所謂機械的な仕事の場合には、それは愉快な習慣となつてゐるのです。それから吾々の多くの勞働には勞働そのものが意識的に感覺的快樂を與へるからです。即ちそれは藝術家の勞働です。」（"News from Nowhere" in Collected Works. vol. 16. pp. 91-92）

ウヰリアム・モリスは勞働の本質をかく解し、そうしてその理想社會においてこの種の勞働の實現することを以てその理想としたのであつた。謂ふところの意は工匠の精神の實現である。彼曰く「工匠の根本精神は生産物それ自體を求め、彼の勞働の生産物として、これを使用することにある。第二義的の用途である市場の需要は彼に對して何の意味もない。彼の製作した貨物が奴隷に使はれやうと王樣に使用されやうと、それは彼の關はるところではない。彼の仕事は出來るだけ優良なものを作ることにある。」と。（"The Socialist Ideal in Art," Collected Works. vol. 23. p. 261）モリスは飽迄も勞働至上主義の人であつたのである。

五

モリスの勞働における理想から、現在の經濟組織下における勞働を觀察すると、それは甚だ理想的のものではない。そは何故に然るか。その救治策如何。このことを說明するためには、モリスの中世紀觀並に現代文明批評の全般を知る必要があるが、私はこれを他日の機會に讓り、

單に勞働に就いてのみ述べやうと思ふ。

モリスは現代社會の勞働分配の不平等なることを指摘する。モリスは勞働の上から見て現在の階級を三つに分つ。その第一は、全然勞働をしない貴族階級、第二は可成の程度において勞働する中産階級、第三は全然勞働のみに從事する勞働階級である。この勞働分配の不平等とその結果である勞働階級の過重な負擔は、勞働階級の休息の希望を奪つて、彼等をして禽獸にも等しい生活を爲さしめるに至るのである。けれどもこれのみが有用なる勞働を化して、無用なる勞働と化する全部の原因ではない。全然勞働から遠かつてゐる貴族階級は單なる全社會に對する寄生蟲に過ぎないが、彼等の數は極めて少數である。次には商業、製造業並に自由職業等に從事してゐる中産階級がある。中産階級は一見勞働してゐるが如くである。けれども彼等は勞働はするが、生産はしない。例へまた生産するにしても、商業の場合のやうに甚だ浪費的である。然るに彼等の消費量は、その勞働量に比較して、著しく大である。さうして彼等の目的は一樣に「効用の生産ではなくして、彼等自身またはその子弟のために、全然勞働しないでもいいやうな地位を得ることである。彼等の一生の野望は、彼等自身のためではないにしても、少くともその子弟のために、明かに社會の負擔たるべき誇るべき地位を得ることである。」（Collected Works, vol. 23. p. 102）然も少數の科學者藝術家等があつて、勞働のための勞働を主張するものがあるが、そは極めて少數に過ぎない。第三に來るべきものは、人口の大多數を占める勞働者階級である。この階級はすべてのものを生産し、他の二階級を維持して行くが、尙ほ劣等な地位にゐる。彼等は心身共に劣等な

地位にゐるのである。それは、資本家的經濟組織による必然的結果であると共に、彼等の多數が、生産者でないことに歸因する。彼等の多數は或ひは陸海軍の軍人であるとか、商店員その他の雇人である。さうして眞の富の生産者ではない。また例へ生産者であつても、その富裕なる非生産的階級の存在の結果需要のある奢侈品その他の下らぬ物の製作に從事してゐる。モリスはこれらのものを富とは稱さないで、無駄だと云ふ。「富とは、自然が吾々に與へるもの、並びに理性的の人々が、彼の合理的の使用のために自然の賜から製作したものである。……即ち自由な、人間らしい、墮落してゐない民衆の快樂に資するすべてのもの、これが富である。」(Collected Works vol. 23. p. 103)然るに現代における多くの勞働者は、かゝる意味における富を生産せずして、無用なる奢侈品等を製作する。かくて彼等の勞働生活は必然的に墮落するに至る。何となれば賃銀勞働者は賃銀支拂者の命するまゝに生産することを強制せらるるからである。かくて多くの勞働者は殆んど奴隷にも近い境遇にある。モリス曰く「現代の社會は、奴隷のやうな營養を採り、衣服を着、家に住み、娯樂をする大多數の奴隷を包含する。さうして彼等の日常の必要は、彼等をして奴隷的貨物を作らしめ、その使用は彼等の奴隷狀態の永續である。」(Collected Works, vol. 23. p. 104)

これらの狀態は何の結果であるか。それは特權階級の利潤のための生産が行はれるからである。現在の經濟制度の下においては、製造業者が生産的に用ゐられる勞働力の使用についての獨占權を持つてゐる。故に製造業者は、資本を持つてゐないで、その勞働力を他人に賣つてのみその生活を維持して行くことの出來る人々からその勞働力を買取つて、これを利用する。この取引における製造業者の目的は彼の資本の增殖にある。この場合において製造業者が、勞働力に對する正當な價格、即ち彼の勞働の全生産物を彼に提供することがあれば、彼は、資本增殖の目的に失敗したのである。然るに彼は生産手段の獨占者であるので、彼は勞働者を强制して彼に有利な取引を取り結ぶことが出來る。さうして製造業者の生産における目的は富ではなくして、利潤である。彼の得る富が眞實の富であるか否かは彼の問ふ所ではない。たゞその貨幣價値の增加があれば、それで足りるのである。かくして現代の勞働は、かゝる商業主義のために低調卑俗の極に達したのである。(Collected Works, vol. 23. pp. 108-110. Monopoly. Or, How Labour is Robbed. vol. 23. pp. 238-254)

六

然らば如何にして墮落した現代の勞働を救治すべきであるか。現代の經濟制度における害惡はこの制度の精髓である資本家的特權制度に存する。即ち少數なる特權階級の側における掠奪と浪費とが、多數者をして貧困ならしめてゐる、もしもこのことが社會の存在に必要缺くべからざるものならば、問題は甚だ簡單である。然るに不充分なる實驗のみでも、勞働者の共同經營が富の生産に適當なることを示してゐる。少數特權階級の必要は、特權のためならば兎に角、富の生産のためには必要のないことである。故に經濟制度改造の第一歩として、人としての義務を廻避し、さうして、彼等の拒絶した仕事を他人に負擔せしめる特權階級を排さなければならない。すべての人々は彼の能力に應じて働かなければならない。さうしてその消費するところを生産しなければならない。かくて條件の平

等を基礎として眞實の社會が建設されるのである。

何人も他人の利益のために犧牲に供せらるることのない眞實の社會にあつては、すべての人が勞働し、さうしてすべての生產物が浪費のない場合には、彼の勞働の適當なる部分を消費することが出來る。故に階級的特權による奪掠が廢止せられ、さうして各人がその勞働の成果を得ることとなる。或る派の社會主義者は社會成員の勞働の成果の充分なる獲得と、これに伴ふ充分なる閑暇とを得ればこれ以上の問題はないと云ふ。然るにモリスはこゝに止まつてゐなかつた。彼は人間の專制的强制がこれによつて廢止せらるゝことを認めた。けれどもモリスは自然の必要の强制に對する報償を要求する。吾々の要求するところは吾々の快樂を減ずることなくして吾々の富を增加することである。自然は吾々の勞働が吾々の生活の快樂の一部となるまでは、遂に征服せられないであらう。（Collected Works, vol. 23. pp. 105-107）

これを再言するとモリスの主張するところは、社會革命後に、すべてのものは協同的に勞働し、何等の掠奪のない場合に、さうして、吾々の必要でないものを作る必要のなくなつた場合に、第一に着手すべきことは、その豐富な富と自由とを利用して、最も普通の、最も必要な勞働をも、すべての人に對して快樂ならしめることである。（p. 108）然らば如何にして勞働を快樂ならしめるか。モリスはその條件を要約して六つとしてゐる。（一）生活の心勞を除くこと、（二）勞働の强度に比例して勞働時間を短縮すること、（三）勞働の性質が單調なる場合には、仕事の種類を多くすること、（四）適當なる機械の使用、（五）各人の能力と性質とに適する仕事を各人に選擇せしめる機會を與へること、（六）裝飾を加へることによつて勞働を愉快ならしめることがこれである。（Morris and Belfort Bax, Socialism, its Growth and Outcome. Kerr ed. p. 230）

さうして勞働を快樂ならしめる前提として現在の制度の改造を必要とすることは既に說くところがあつた。この現在の制度の改造は土地、機械、工場等を包含する資本を社會有として、その萬人の利益のために使用することに依つて利潤のための勞働を廢止し、勞働の成果を豐饒ならしめるにある。この前提の成熟された後においてのみ勞働の享樂化を論ずることが可能なるに至るのである。（Collected Works, vol. 23. p. 110）勞働の享樂化のもう一つの前提としては勞働それ自らが有意義のもの、有用なるものでなければならないことである。即ちそが人としての義務を遂行し、社會的道德的の要求に合致するものでなければならない。この二つの前提があつて始めて、前記の六つの勞働享樂化の條件を云々することが出來るに至るのである。

先づ勞働時間の短縮である。これは多くを論ずる必要がない。もし浪費さるる勞働がないとすれば、勞働は短時間とすることが出來る。さうして現在苦痛な勞働も短時間の間ならばこれに耐えることが出來るであらう。次に最も重要なのは仕事の變化である。人をして日々同一な仕事に從事せしめ、その變更、休止の希望を與へないのは、人を牢獄に入れて置くのと同一な苦痛を與へることである。專制的な利潤獲得者の外はかゝることを必要としない。モリスの說によると吾々は少くとも三つの職（クラフト）を習得し、これを實行することが出來る。人は力を要する仕事と共に力を要さない仕事に從事することを欲す

るであらう。さうして吾々人間にとつて最も必要な、最も愉快な仕事である土地の耕作に從事することを嫌ふ人は少ないであらう。この仕事の多樣化について問題となるのは敎育のことである。現在の敎育はあまりに商業的競爭の災禍を蒙つて居る。そは人々をして商業的組織の間にあつて地位を得るための便宜にのみ行はれるのに過ぎない。さうして手藝 handicraft の如きは全然顧みらるることがない。この狀態は甚だ望ましいものではない。故に來るべき新社會における敎育は個性の發揚に適するやうな手藝を修得せしめることを要する。かくしてのみ各人の仕事を多樣化することが出來るのである。仕事の多樣化と云ふことにつき論ずべきまだ一つの問題がある。それは民衆藝術の問題である。民衆藝術は商業主義のために撲滅された。けれどもそは人間が自然と鬪爭し始めてから、資本的制度が起るまで存續してゐたのであつた。さうしてそが存續してゐた間は、人間によつて製作されるあらゆるものに、恰度自然によつて製作されたすべてのものが自然によつて飾られるやうに、裝飾が施されてあつた。資本制度以前における工匠は彼の手によつて製作されるすべてのものに極めて自然に裝飾した。そうしてこの藝術の起源は勞働者がその仕事において變化を求める必要を感じたことにあつた。この仕事における變化とその結果による勞働の快樂こそ實に重大なる問題である。然かもその表現たる民衆藝術は現在の世界から消滅したのである。かくて勞働は、その快樂を奪はれて、一の負擔たるに至つたのである。

勞働の享樂化に關しては仕事の變化と勞働時間の短縮の外に、愉快なる環境を必要とする。現在の如き人口の稠密の都會と亂雜な工場とは單に資本的制度の維持にのみ必要である。資本家的生產と資本家的交換と資本家的土地の貸與とは、資本の利益を增進するために都市に人口を集中せしめた。然るに眞の生產のためには必しも都市に人口の集中することを要さないのである。必ずしも工場的生產たるを要さない。すべての人々がその靜かな田舍の家で、或ひは小工業的村落や小さい町でその職に從事してはならないと云ふ理由はない。また例へ工場的生產を必要とする場合においても、工場に對する諸科學の應用、仕事の變化の實行され得ない筈はない。たゞ資本的利潤の追究を主として產業を經營する場合においてのみかゝる施設を行ふを得ないのである。（Collected Works. vol. 23. pp. 112-116, 209-210）

次には機械の問題がある。近代における機械の發明は實に驚嘆に値する。さうして機械は「勞働を省く」ものと稱せられた。けれども吾々の期待は裏切られたのであつた。機械の眞に成し遂げたことは熟練なる勞働者をして不熟練勞働者と同位に居らしめ、單に產業豫備軍の數を增加し、さうして勞働の者生活を不安にし、資本の增殖に援助を與へただけであつた。要するに近代人は彼等自身の發明した怪物のために奴隸とされたのであつた。けれどもモリスは藝術的精神の豐富な人に往々あるやうに機械を絕對に排斥するものではなかつた。モリスは「機械をして吾々の從僕たらしめず、吾々の主人たることを許したことが、現代の吾々の生活の美を傷けた」ことを承認して居る。（"How We Live and How We Might Live." in Signs of Change. Collected Works, vol. 23. p. 24）さうして彼は彼の未來社會において一定の程度までの機械の使用を許すのである。即ち必要にして合理的な

勞働で然かもその勞働に享樂性のない機械的勞働に對しては機械を使用して、勞働の負擔の輕減を計るのである。何故に一定の程度までに機械の使用を限定することが出來るか。それは敎育普及の結果何人も手藝に對する興味を覺え、かくて多くの仕事は手によつて行はれるに至るであらうからである。(Collected Works, vol. 23. pp. 20, 117. Art under Plutocracy. pp. 171-180)

かくの如き勞働の享樂化は果して何等の犧牲なくして行はるるであらうか。モリスはこの問題をあまりに重大視してゐないかの如くである。モリスはある一定の犧牲の存することを認める。即ちもし現在の生產の如き程度で萬人の勞働する未來の社會において生產が行はれるものと假定すれば、それは勿論生產高の增加となる。けれども勞働の享樂化において吾々の拂ふ犧牲は生活向上のための犧牲があつて、吾々にとつては少しの苦痛にもならない筈である。(Collected Works. Vol. 23. P. 116)

七

モリスの勞働論はその藝術觀に立脚してゐる。彼はその社會主義的藝術觀を表明して云ふ。「故に藝術における社會主義者の理想の第一點は、それが全民衆の共同でなければならないと云ふことである。このことは、藝術が一定の型態を有し、耐久的に作られたすべてのものの缺くべからざる一部分となることを認めらるることに依つて、達し得る。言葉を換へて云へば、藝術を以てある特權ある地位に對する附隨物として見ずして、社會主義者は、これを社會もその成員から奪ふ權利を持つてゐない人生の必要だと主張する。さうして彼はまた主張する。この要求が樹立されるためには、民衆が彼の最も適する仕事に從事するの機會を持たなければならない。單に人間の努力を無駄にしない許りでなく、その努力は快樂を以て遂行されなければならない。私はこゝで自分が屢々云つてゐることを繰返さなければならないが吾々の精力を愉快に用ゐると云ふことは、すべての藝術の源泉があると共にすべての幸福の原因である。即ちこれは人生の目的である。故にすべての社會の成員にその精力を愉快に用ゐる適當な機會を與へない社會は人生の目的を忘れたものであり、さうしてその職分を充たしてゐるものではない。故にそは單なる專制であつて、すべての點から反對せらるべきものである」。(Socialist Ideal in Art. Collected Works, vol. 23. pp. 260-261)

かくの如き立場にあるモリスが勞働の原則として、(一)その勞働に爲すだけの價値があること、(二)勞働それ自らが快樂なること、(三)斯くの如き條件の下において爲す勞働が煩雜ならず人心を極度に勞さないことを要求し、さうして彼の未來社會において(一)名譽あるそうして適當なる勞働、(二)健全にして美しい住宅、(三)心身の休息のための充分なる閑暇を要求したことは極めて自然である。("Art and Socialism." in Lectures on Socialism. Collected Works, vol. 23. pp. 209-210.) さうしてモリスの理想的生活が(一)健全なる身體、(二)過去、現在及び未來に同情ある能動的の精神、(三)健全なる身體と活動的なる精神とに適する職業、(四)住みよい美しい世界を實現することにあるを知るならば、(How We Live and How We Might Live. Collected Works, vol. 23. p. 25)モリスの社會觀における彼の勞働觀が如何に重要なる地位を占めてゐるかを知ることが出來るであらう。(一九二二・三・一四稿了)